

トルコ語のなぞなぞの音声分析*

福盛 貴弘[†]

キーワード：トルコ語、なぞなぞ、イントネーション、ポーズ、韻律節

1 序

1.1 トルコ語のなぞなぞ

21 世紀におけるトルコ語¹のアクセント研究およびイントネーション研究は、前世紀と比べて飛躍的な発展を遂げてきた。しかし、まだ断片的な研究が多く、全体像を捉える包括的な研究の域には達していない。こういった現状の中では、理論言語学に基づく検証よりも、記述言語学に基づくデータの積み上げがまだまだ必要であると感じる。

そこで、本研究ではなぞなぞをとりあげ、その音声学的特徴を記述することにした。なぞなぞをとりあげる理由として、城生(2001:12-13)では、

「なぞなぞ」は非常に短い言語形式をとっておりながら、それ自身すでに「ディスコース」としての立派なまとまりを持っている。ここから、文以上のレベルに関する音声情報処理を考える際に、非常に示唆に富む具体的な材料を供与しうる。

* 本稿は城生(1998, 2001)に掲載されたトルコ語のなぞなぞに対して再分析したものである。トルコ語のなぞなぞの調査については、1998 年に筆者と城生先生とで行なった共同調査であったため、互いに同じデータを共有している。本稿は科学研究費助成事業、学術研究助成基金助成金基盤研究 C(課題番号 23520472)「トルコ諸語におけるプロソディー分析」(平成 23-25 年度、研究代表者：福盛貴弘)による研究成果である。

[†] 大東文化大学外国語学部

¹ 本稿で扱うトルコ語はイスタンブル方言を基とした現代トルコ語である。トルコ語の文字と音声の対応を略記すると以下の通りである。a, b, c[dʒ], ç[tʃ], d, e, f, g, ğ[長音化, 無音], h, ı[w], i, j[ɟ], k, l, m, n, o, ö[ø], p, r, s, ş[ʃ], t, u, ü[y], v, y[j], z

と記されている。なぞなぞは文献によって伝承されることもあるが、基本的には口承文芸の一分野と捉えることができる。また、なぞなぞは定型韻文のようなパターンをとることがある。こういった性質があるなぞなぞから、どのような音声学的特徴が析出されるかを調査することが本研究の目的となる。

1.2 韻律節

韻律節は城生(1998, 2001)で提唱された用語である。城生(2001:459)では、

橋本進吉によって提唱された「文節」の概念を、その音響事象に注目することによって再評価し、単に pitch やポーズの側面以外にも種々の韻律的特徴を統合した上で、音声情報を手がかりとして言語学的単位を画定する(中略)「韻律節」という、より幅広い音声情報に立脚した言語学的単位の措定を試みた。

と説明されている。韻律節は、文節を出発点とした「プロソディックな観点からひとまとまりをなすものに対して付与された枠組み」であり、その範囲がアクセント単位にとどまらず、句音調から節のイントネーションにまで分散されることが予測されている。

この枠組みに近い概念に、桐越(2008)における韻律フレームがあげられる。韻律フレームは、俳句や短歌などの定型韻文における持続時間長の等時性を出発点としている。定型韻文は定型の拍数が優先されるので、それぞれの句が文法的な境界とは異なる場合がある。桐越(2008)では、文法によって決定される句を文法句、文法に関係なく五七五に区切られたそれぞれを韻律句と呼んでいる。韻律フレームは五拍と七拍という拍数の違いに関わらずポーズを含めた等時性に適用させる枠組みである。例えば、

/あいうえお○○○/いろはにほへと○/かきくけこ○○○/

(○はポーズ)

のような構造である場合、/ から/ まで、すなわち韻律句および後続のポーズを含んだ枠組みが韻律フレームである。

本研究では、持続時間の等時性については別稿に譲り、城生(1998, 2001)における韻律節の境界画定に關与する、イントネーションおよびポーズからの特徴を再考する。城生(1998, 2001)では「単に pitch やポーズの側面」とされているが、データを観察しているうちに、イントネーションにある程度一定したパタンがあるといった仮説を立てることができた。そこで、トルコ語のアクセントおよびイントネーションがピッチにどのように反映しているかの基本を確認した上で、なぞなぞ分析にのぞむことになる。

1.3 トルコ語のアクセント・イントネーション

トルコ語のアクセントについては福盛(2010)で(1)(2)のように、イントネーションについては福盛(2011)で(3)のように記されている。

<アクセント>

- (1)アクセント単位内の音節境界に下がり目がない型が基本アクセント、下がり目がある型が例外アクセントである。
- (2)基本アクセントにおいて最終音節が高くなる現象は音調指定²によるもので、アクセント指定による下がり目の影響で直前の音節が高くなる現象とは区別される。

<イントネーション>

- (3)名詞句の終わりで上昇調となり、平叙文の文末は、品詞および肯定か否定かを問わず基本的に下降調になる。

こういった基本的特徴をふまえ、韻律節の境界を画定する基準を後述の2.3節に記す。

²この音調指定はアクセントではなく、イントネーションによるものと推測しているが、音韻論的句に対するイントネーション(句音調)か、統語論的句あるいは節、すなわちリズムグループに対するイントネーションであるか、今のところ特定できていないので、アクセントともイントネーションとも断定せず音調としている。

2 方法

2.1 被調査者

本調査における被調査者の情報（調査時）は以下の通りである。

| | |
|-------|-----------------|
| 氏名 | Deniz Bökesoy 氏 |
| 年齢 | 20 代 |
| 性別 | 女性 |
| 言語形成地 | Ankara |

2.2 調査方法

調査は 1998 年 5 月に行なった。なぞなぞが記された文献³から選んでもらうのではなく、被調査者の内省によってなぞなぞを書き出してもらい、その後そこで書かれたテキストを音読してもらった。録音場所・器材は以下の通りである。

録音場所：筑波大学人文社会学系棟 B613 音声実験室

録音器材：SONY 社製 DAT TCD-D7

AKG 社製 D112 ダイナミックマイクロフォン

2.3 分析方法

韻律節を画定するために主に音調とポーズを基準として用いた。

音調については、文中の名詞句末における上昇調、文末の動詞句末における自然下降調がトルコ語の基本イントネーションパターンとなる。本研究での分析に適用すると、韻律節末尾において次の韻律節が後続する場合には上昇調に、その韻律節で終わる場合には自然下降調になる。ただし、上昇調についてはさらに二分する必要がある。文中ではアクセントによる高音調と類似している上昇調と、文末に相当すると解釈できる位置での積極

³ Basgöz and Tietze (1973)、柴田他 (1984)など。

的な上昇調がある。ここでは、便宜的に前者を句末上昇調、後者を文末上昇調と呼ぶことにする⁴。

韻律節は、大韻律節、中韻律節、小韻律節の3つに分けた。なぞなぞ全体を大韻律節とすることを基本とするが、末尾に文末上昇調あるいは自然下降調の後に長めのポーズ⁵を伴う場合には複数の大韻律節を画定した。中韻律節は、末尾に文末上昇調がある場合に大韻律節内で画定した。小韻律節は、末尾に句末上昇調があつて韻律的に構造的区切れを感じる場合に中韻律節あるいは大韻律節内で画定した。

3 結果

結果の提示は以下のように行なう。

まず、番号、なぞなぞと答えをトルコ語で示している。番号は調査の際に被調査者が付けた番号であり、城生(2001)と共通している。その次に、トルコ語に対する語義と接辞⁶のグロスおよび翻訳を示している。

次いで、基本周波数曲線を示し、その下になぞなぞ本文を示している。ここでの本文には、韻律節の解釈も含めて表記している。韻律節は、大中小の3段階に区別して、(4)のように示している。

⁴ 上昇調については、結果で基本周波数曲線を示しているが、主観的聴覚印象による記述も併用している。基本周波数曲線だけで、アクセントによる高音調と句末上昇調、句末上昇調と文末上昇調の区別することについては、現時点では確立していないので今後の課題とする。

⁵ ポーズについては、大韻律節末尾にはポーズがある。中韻律節末尾にポーズがある場合があるが、相対的に大韻律節末尾の方が持続時間張は長い。中韻律節末尾のポーズは任意で必須ではない。相対的にどの程度の長さで区別するかについては、現時点では確立していないので今後の課題とする。

⁶ 一部の接辞は以下のように略記した。対：対格、属：属格、与：与格、位：位格、奪：奪格、1：1人称、2：2人称、単：単数、複：複数、所：所有、指小：指小辞、名：名詞化、有：「<語幹>がある」という意味になる形容詞化、否現：否定現在

(4) 韻律節

| | 記号 | 末尾の特徴 |
|---|-----|------------------------|
| 大 | { } | 文末上昇調あるいは自然下降調+ポーズ (大) |
| 中 | // | 文末上昇調 |
| 小 | / | 句末上昇調による構造的区切れ |

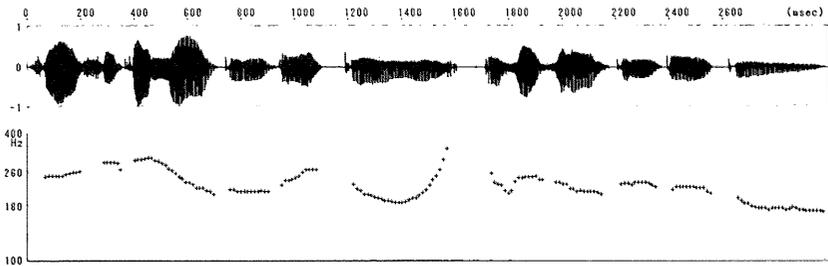
韻律フレームを付記した本文の下に、ピッチが高くなっているところ(H)と上昇しているところ(R)を記号で示した。Hはアクセントによる高音調および句末上昇調に対して、Rは文末上昇調に対して付与している。

- 1. Çalışıdan aldım bir tane,
eve geldim bin tane.

nar

Çalışı-dan al-dı-m bir tane,
 市場-奪 買う-完了-1 単 1 個
 市場で買うと 1 個
 ev-e gel-di-m bin tane.
 家-与 来る-完了-1 単 1000 個
 うちであけると 1000 個

nar ざくろ



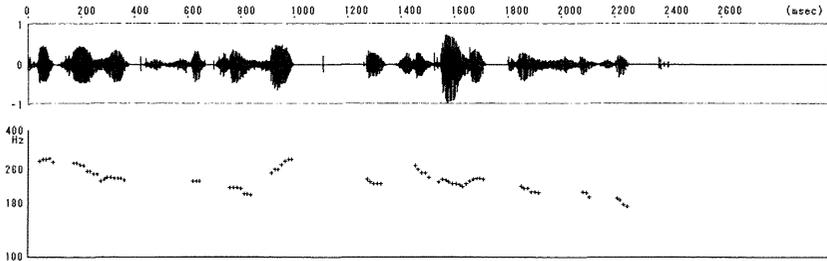
{Çalışı dan al dım/ bir ta ne, // eve gel dim / bin tane.}
 H H H R H H H

2. Küçücük fiçıcık,
içi dolu turşucuk.

limon

Küçü-cük fiçı-cık,
小さい(<küçük)-指小 樽-指小
とっても小さい小さい樽の
içi dolu turşu-cuk.
中-限定 いっぱいの ピクルス-指小
中に詰まった小さいピクルス

limon レモン



{Küçücük fi çı cık, // içi dolu tur şucuk.}

 H H R H H H

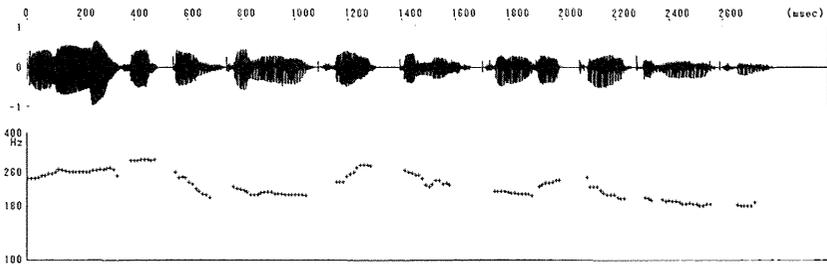
3. Bilmece bildirmece,
dil üstünde kaydır-maca.

dondurma

Bil-mece bil-dir-mece,
知る-名 知る-使役-名
なぞなぞ

dil üst-ü-nde kay-dır-maca.
舌 上-限定-位 すべる-使役-名
舌の上ですべらせるもの⁷

dondurma アイスクリーム



{Bil me ce bil dir me ce, // dil üs tünde kaydır ma ca.}

H R H H H

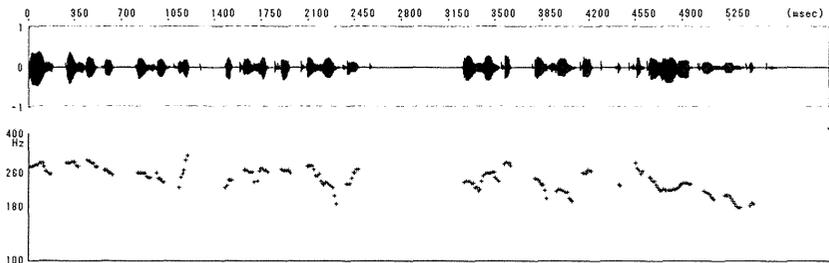
⁷ 動詞語幹 kay-は「すべる、ずれる」という語義だが、辞書形は kaymak となる。kaymak は同音異義語として名詞の「クリーム、乳皮」という語義がある。これを想像することで、わずかな情報から答えが導き出せるのではないかと推測する。ちなみに、kaymaklı dondurma は「ミルクで作ったアイスクリーム」である。

4. Biz bizidik bizidik,
otuz iki kız idik.
Ezildik büzüldük,
iki duvara dizildik.

diş

| | | |
|-----------------|-----------------|------------|
| Biz | biz-idi-k | biz-idi-k, |
| 私たち | 私たち-完了-1 複 | 私たち-完了-1 複 |
| むかしむかし | 私たちは | |
| otuz iki kız | idi-k. | |
| 30 2 娘 | 完了-1 複 | |
| 32 人の生娘だった | | |
| Ez-il-di-k | büz-ül-dü-k, | |
| 押しつぶす-受身-完了-1 複 | しめつける-受身-完了-1 複 | |
| 押しつぶされてしめつけられて | | |
| iki duvar-a | diz-il-di-k. | |
| 2 壁-与 | 並べる-受身-完了-1 複 | |
| 2 枚の壁に並べられた | | |

diş 歯



{Biz/ bizidik bizidik// otuz iki kız idik.}

{Ezildik büzüldük// iki duvara dizildik.}

H H R H H R

H R H H

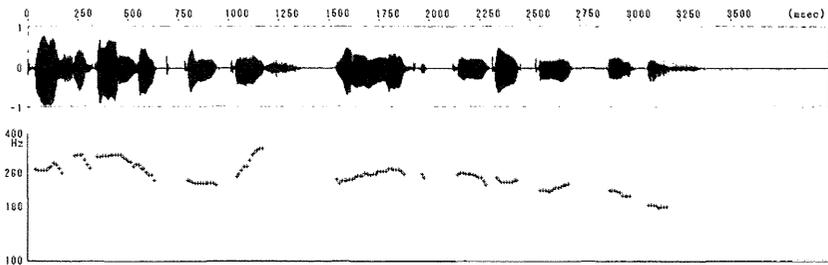
5. Karşıdan baktım taş,
yanına gittim dört ayak bir baş.

kaplumbağa

Karşı-dan bak-tı-m taş,
向こう-奪 見る-完了-1 単 石
遠くからみると石

yan-ı-na git-ti-m dört ayak bir baş.
そば-限定-与 行く-完了-1 単 4 足 1 頭
近くでみると 4 つ足に頭

kaplumbağa 亀



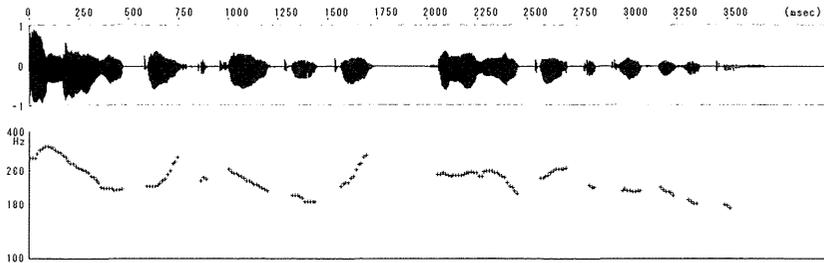
{Karşıdan bak tım/ taş,// yanına git tim/dört ayak bir baş.}
H H R H H H H

6. On ay yatar iki ay kalkar,
feneri yakar etrafa bakar.

ateşböceği

On ay yat-ar iki ay kalk-ar,
10 月 寝る-現在 2 月 起きる-現在
10ヶ月寝て2ヶ月起きる
fener-i yak-ar etraf-a bak-ar.
灯り-対 つける-現在 まわり-与 見る-現在
明かりをつけてまわりをみる

ateşböceği ほたる



{On ay yatar// iki ay kal kar,}

{feneri yakar// etra fa bakar.}

H

R

H

R

H

R

H

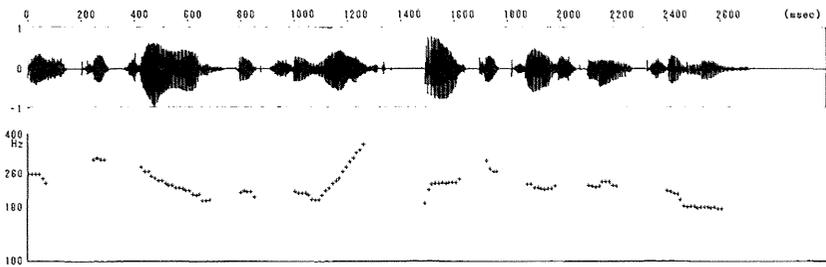
7. Üstü çayır biçilir,
altı çeşme içilir.

koyun

Üst-ü çayır biç-il-ir,
 上-限定 草むら刈る-受身-現在
 その上にある草は刈られて

alt-ı çeşme iç-il-ir.
 下-限定 泉 飲む-受身-現在
 その下にある泉は飲まれる

koyun 羊



{Üs tü çayır bi çi lir, // al tı çeş me içilir.}
 H R H H

8. Kul görür Allah görmez.

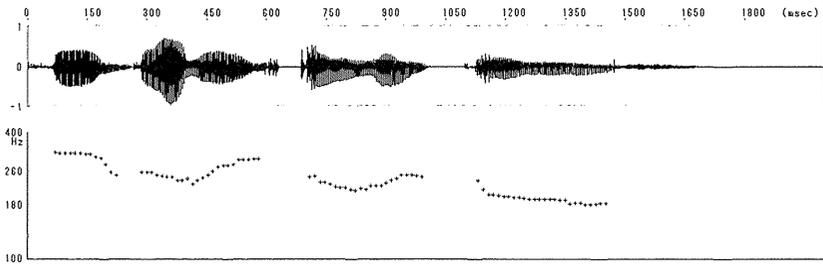
rüya

Kul gör-ür Allah gör-mez.

人 見る-現在 神 見る-否現

人は見る 神は見ない

rüya 夢



{Kul gö rür// Al lah gör mez.}

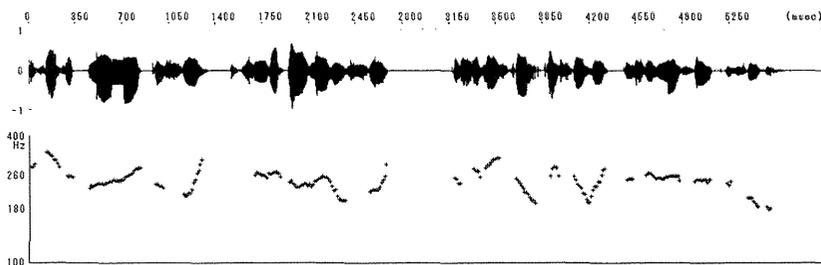
H R H

9. Ufacık mermer taşı,
 içinde beyler aş.
 Pişirirsen aş olur,
 pişirmezsен kuş olur.

yumurta

Ufa-cık mermer taş-ı,
 小さい(<ufak)-指小 大理石 石-限定
 とても小さい大理石
 iç-i-nde bey-ler aş-ı.
 中-限定-位 紳士-複 料理-限定
 石の中にはごちそうが
 Piş-ir-ir-se-n aş ol-ur,
 火が通る-使役-現在-仮定-2 単 料理 なる-現在
 火を通したら食べ物に
 piş-ir-mez-se-n kuş ol-ur.
 火が通る-使役-否現-仮定-2 単 鳥 なる-現在
 火を通さねば鳥になる

yumurta 卵

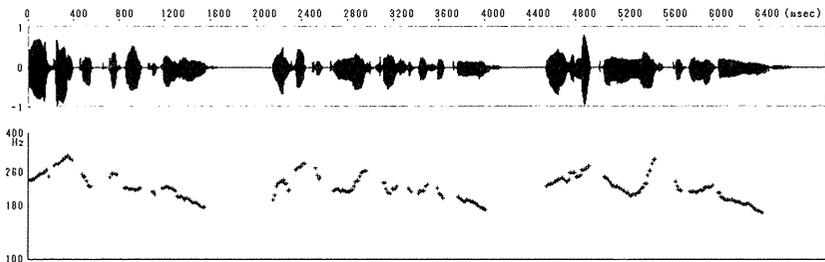


{Ufacık mermer taşı, // içinde beyler aş.} {Pişirirsen aş olur, // pişirmezsен kuş olur.}

H H R H H R H H R H H

10. Baldan tatlı, baltadan ağır.
 Elde tutulmaz, çarşıda satılmaz.
 Mendile konulmaz, tadına doyumaz.
 uyku

Bal-dan tat-lı, balta-dan ağır.
 蜜-奪 味-有 斧-奪 重い
 蜜より甘く斧より重い
 El-de tut-ul-maz, çarşı-da sat-ıl-maz.
 手-位 つかむ-受身-否現 市場-位 売る-受身-否現
 手ではつかめず 店にはない
 Mendil-e kon-ul-maz, tad-ı-na doy-ul-maz.
 ハンカチ-与 置ける-受身-否現 味-限定-与 満足する-受身-否現
 ハンカチに置けず 味は飽きない
 uyku 眠り



{Baldan tatlı//baltadan ağır.} {Elde tutulmaz//çarşıda satılmaz.} {Mendile konulmaz// tadına doyumaz.}

H R H H R H H R H

11. Bir kızım var.
Gelen öper giden öper.

su bardağı

Bir kız-ım var.

1 娘-1 単所 ある

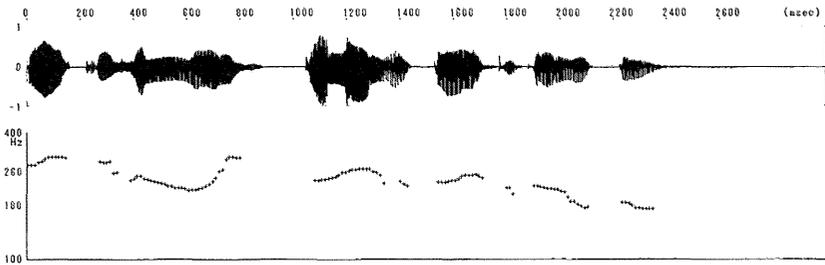
私の娘が 1 人いる

Gel-en öp-er gid-en öp-er.

来る-動名詞 キスする-現在 行く-動名詞 キスする-現在

行き交う人がキスをする

su bardağı 水飲みグラス



{Bir kızım var.} {Gelen ö per// gi den ö per.}

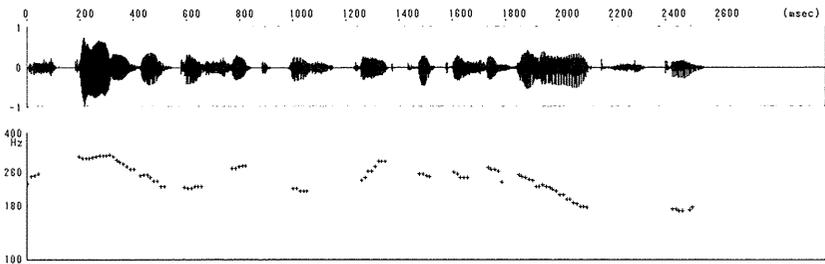
H R H R H

12. İstanbul'da süt pişti.
Kokusu buraya düştü.

mektup

İstanbul-'da süt piş-ti.
イスタンブル-位 ミルク 煮える-完了
イスタンブルでミルクを温め
Koku-su bura-ya düş-tü.
におい-限定 ここ-与 降る-完了
においはここへやってきた

mektup 手紙



{İs tanbul' da süt piş ti.// Kokusu buraya düş tü.}
H HH R H

13. Parasını el alır.
Dumanını yel alır.

sigara

Para-sı-nı el al-ır.

金-限定-対 手 取る-現在

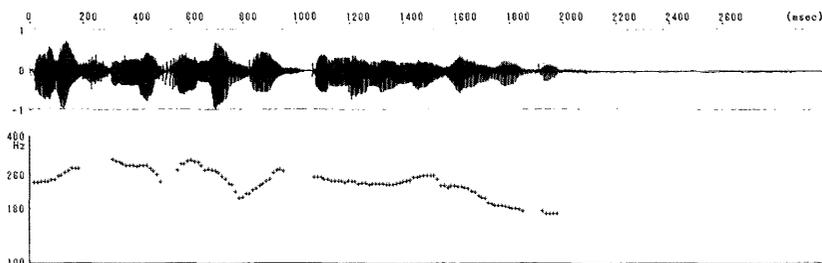
お金は人が持っていていき

Duman-ı-nı yel al-ır.

煙-限定-対 風 連れて行く-現在

煙は風が連れていく

sigara たばこ



{Para sını el a lır.// Dumanını yel alır.}

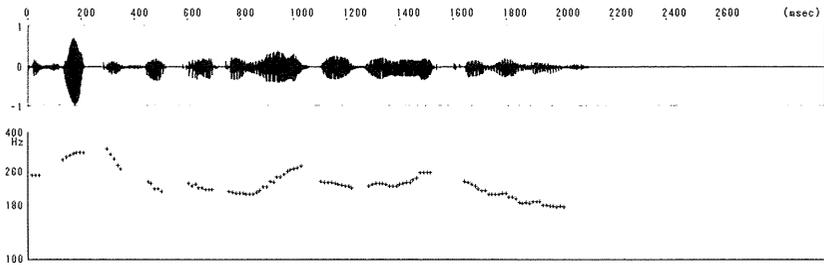
H H R H H

14. Ufak ufak odalar,
birbirini kovalar.

tren

Ufak ufak oda-lar,
小さい 小さい 部屋-複
小さい小さいお部屋がたくさん
birbiri-ni kovala-r.
お互い-対 追う-現在
次々後を追っている

tren 列車



{Ufak ufak oda lar, // bir bi ri ni kovalar.}

H

R

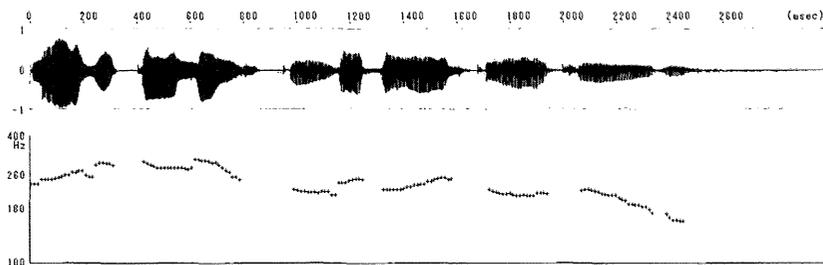
H

15. Mavi tarla üstünde
beyaz güvercin yürür.

yelkenli

Mavi tarla üst-ü-nde
青い 畑 上-限定-位
青い畑のその上で
beyaz güvercin yür-ür.
白い 鳩 歩く-現在
白い鳩さん歩いている

yelkenli ヨット



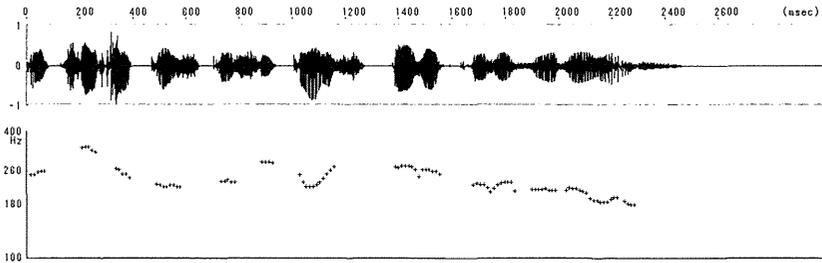
{Ma vi tar la üs tünde/ beyaz güver cin yü rür.}
 H H H H

16. İç-i ateş dışı taş,
biri kuru biri yaş.

dünya

İç-i ateş dışı taş,
中-限定 熱 外-限定 石
中身は熱いが 外は石
biri kuru biri yaş.
一方 乾いた 一方 湿った
乾いたところ 湿ったところ

dünya 地球



{İ ç i a teş/ dı şı taş, // biri kuru/ biri yaş.}

H

H R

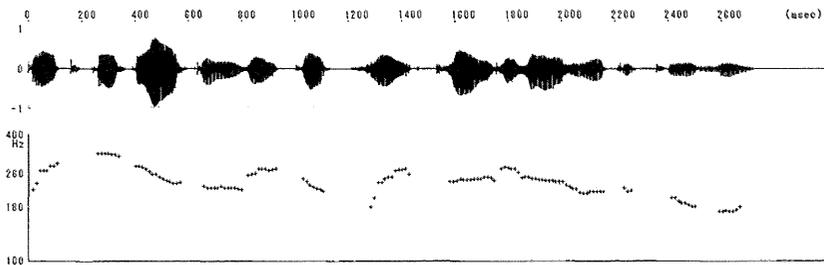
H

17. Gökte gördüm bir köprü.
rengi var yedi türlü.

gökkuşağı

Gök-te gör-dü-m bir köprü.
空-位 見る-完了-1 単 1 橋
空に見える 1 つの架け橋
reng-i var yedi türlü.
色(<renk)-限定 ある 7 いろいろ
色は 7 色

gökkuşağı 虹



{Gök te gör düm/ bir köp rü// ren gi var/ ye di tür lü.}
H H R H H

18. Ağaç üstünde kilitli sandık.

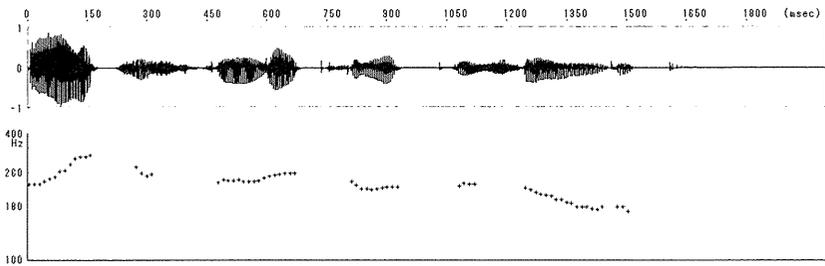
ceviz

Ağaç üst-ü-nde kilit-li sandık.

木 上-限定-位 錠前-有 長持

木の上にある錠前がついた長持

ceviz くるみ



{ Ağaç üstünde/ kilitli sandık. }

H H H

19. Bize bir misafır geldi.

Yeşil feraceli, kırmızı entarili, siyah düğmeli.

karpuz

Biz-e bir misafır gel-di.

私たち-与 1 来客 来る-完了

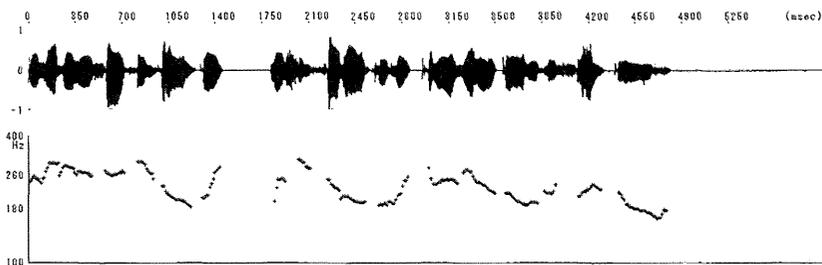
うちにお客がやってきた

Yeşil ferace-li, kırmızı entari-li, siyah düğme-li.

緑 コート-有 赤 ドレス-有 黒 ボタン-有

緑のコート 赤いドレス 黒いボタン

karpuz すいか



{Bize bir misafır geldi.} {Yeşil feraceli, kırmızı entarili, siyah düğmeli.}

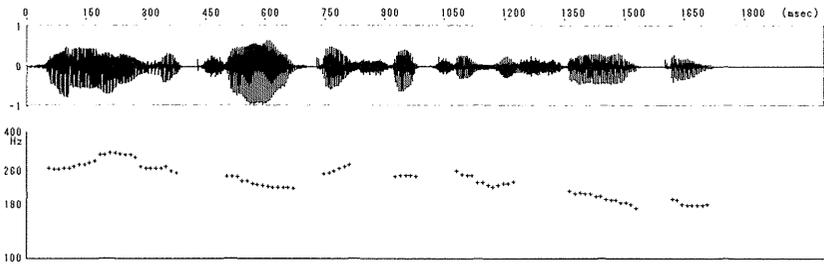
H H R H R H R H

20. Hanım içerde,
saçı dışarda.

mısır

Hanım içer-de,
婦人 中-位
ご婦人が中に
saç-ı dışar-da.
髪-限定 外-位
髪の毛は外に

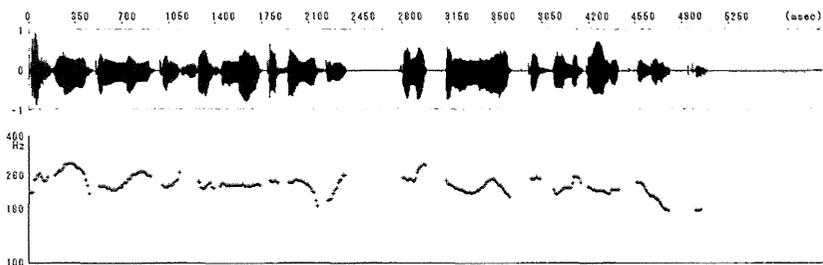
mısır どうもろこし



{Ha nım i çer de,/ sa çı dı şar da.}
H H H

21. Ah ne idim ne idim, sahralarda bey idim.
 Felek beni ne yaptı, beli bağı kul yaptı.
 süpürge

Ah ne idi-m ne idi-m, sahra-lar-da bey idi-m.
 ああ 何 完了-1 単 何 完了-1 単 砂漠-複-位 紳士 完了-1 単
 ああ、一体私はなんだったんだ。砂漠では紳士扱いだったのに⁸。
 Felek ben-i ne yap-tı, bel-i bağı kul yap-tı.
 運命 私-対 何 する-完了 腰-対 縛られた 奴隷 する-完了
 運命は私に何をしたんだ。腰を縛られた奴隷にされた。
 süpürge ほうき



{Ah ne idim ne idim, // sahralarda bey idim.} {Felek beni ne yaptı, // beli bağı kul yaptı.}
 HH HR HH R H HH R H HH

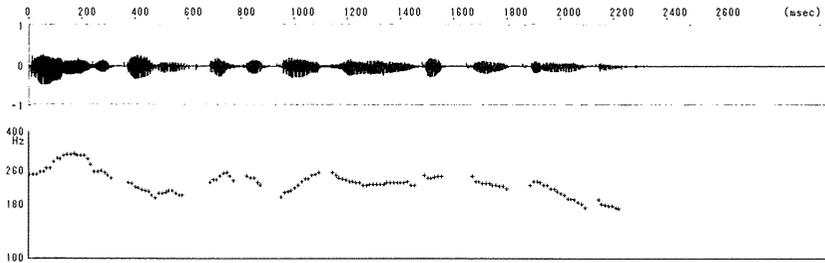
⁸ トルコには干し草で作られた箒がある。よって、草が砂漠で貴重な存在であることから答えが導き出せると解釈した。

22. Ben giderim o gider.
Yanımda tin tin eder.

gölge

Ben gid-er-im o gid-er.
私 行く-現在-1 単 彼 行く-現在
私が行くと彼も行く
Yan-ım-da tin tin ed-er.
側-1 単所-位 そーっと する-現在
そばでそーっとついてくる

gölge 影



{Ben giderim o gi der.// Yanım da tin tin eder.}

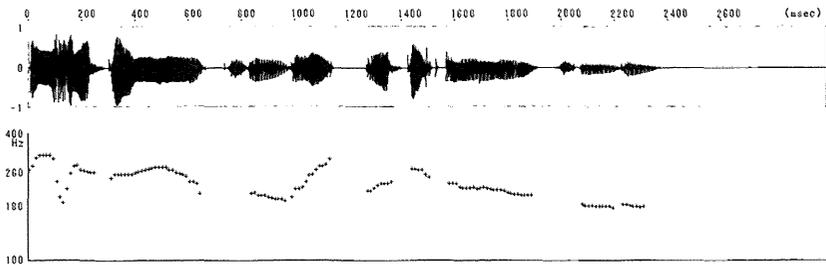
H H R H H

23. O odanın içinde,
oda onun içinde.

ayna

O oda-nın iç-i-nde,
それ 部屋-属 中-限定-位
それは部屋の中に
oda onun iç-i-nde.
部屋 その 中-限定-位
部屋はそれの中に

ayna 鏡



{O o da nın iç in de, // o da onun iç in de.}

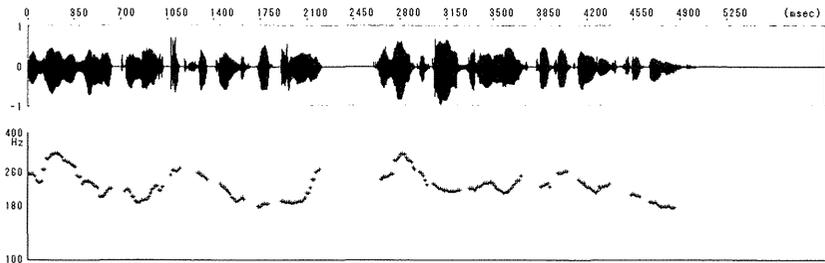
H H R H

24. Uzun uzun akalar,
ak sakallı babalar,
gelir gider duramaz,
gece gündüz çabalar.

dalga

Uzun uzun ak-ala-r,
長い 長い 流れる-反復-現在
寄せては返す長い流れ
ak sakal-lı baba-lar,
白 あごひげ-有 父-複
白いおひげの親父たち⁹
gel-ir gid-er dur-amaz,
来る-現在 行く-現在 止まる-不可能
行ったり来たりたゆまなく
gece gündüz çabala-r.
夜 昼 努力する-現在
昼夜を問わずつとめてる

dalga 波



{Uzun uzun a kalar, // ak sakallı babalar,} {gelir gider duramaz, // gece gündüz çabalar.}

H RH H R H R H H

⁹ baba には「父」の他に「球状のもの」という語義がある。この句は baba が掛詞であることによって「白いおひげの親父たち」から「波頭」を推測できると解釈して翻訳した。

4 考察

4.1 韻律節の画定

城生(2001)では¹⁰、形態音韻論的な単位であるアクセント節が相対的に小さい単位であり、複数のアクセント節を束ねるプロソディックなまとまりを韻律節としている。本研究における大中小といった3段階の区分との対応は以下のとおりである。

(5)本研究と城生(2001)の用語との対応

| | | |
|------|------|--------|
| 大韻律節 | 中韻律節 | 小韻律節 |
| | 韻律節 | アクセント節 |

本研究ではイントネーションを基本としているので、アクセント節については扱っていないが、対応関係は小韻律節 \geq アクセント節となる。城生(2001)の韻律節は本研究での中韻律節に概ね対応する。韻律節は設定当初から 1.2 節に示したように句音調から節におけるイントネーションにまで分散されることを示唆している。本研究で精査した結果、トルコ語のなぞなぞにおける適用においては、大韻律節 \geq 韻律節 \geq 小韻律節といったように幅がみられた。以下、具体的に対応関係をみていくことにする¹¹。

2, 3, 5, 7, 8, 12, 13, 14 については、中韻律節と韻律節が一致している。1, 16, 17 は中韻律節内に小韻律節を画定しているが、中韻律節と韻律節は一致している。これら 11 例については、両研究で画定が一致したものになっているといえる。

次に、韻律節が小韻律節と一致している例を示す。15, 18, 20 が該当する。これらはイントネーションパターンが文末上昇調になっていなかったため、本研究では小韻律節として扱った。これらの例では、大韻律節の中に中韻

¹⁰ 城生(1998)のデータ記述は素描に近いものであり、城生(2001)で修正されているので、以降データの分析結果については城生(2001)をもとに検証する。

¹¹ ただし、城生(2001)では 1~20 までしか示されていないので、両研究の対応関係はその範囲内のみで示すことにする。

律節を画定していないので、実質的に小韻律節が韻律節に一致している¹²。よって、これら3例も画定が一致しているといって差し支えない。

最後に、大韻律節の設定によって画定が異なる例を示す。4, 9は韻律節が4つと捉えているが、ポーズをふまえると大韻律節2つの中に中韻律節があると捉えることができる。

(6) 4における画定の違い¹³

Biz bizidik bizidik,

otuz iki kız idik.

Ezildik büzüldük,

iki duvara dizildik.

城生(2001)¹⁴

本研究

i|iii|iii||

{i/iii iii//

ouii|iii||

ouii iii}

eii|üüü||

{eii üüü//

ii|uaa|iii||

ii uaa iii}

(7) 9における画定の違い

Ufacık mermer taşı,

içinde beyler aşı.

Piştirirsen aş olur,

pişirmezsın kuş olur.

城生(2001)

本研究

ua1|eea1||

{ua1 eea1//

iee|eea1||

iee eea1}

iiie|aou||

{iiie aou//

iee|uou||

iee uou}

¹² この問題は音調パターンを音響音声学的に捉えて基準を統一した結果、生じた問題であると考えられる。大韻律節の中に句末上昇調しかない場合には、中韻律節とみなすという設定基準が考えられるが、それは認知面からの証拠が必要となるため、今後の課題としたい。

¹³ 両研究の対照については、城生(2001)で示された母音のみの表記にあわせる。

¹⁴ アクセント節を|、韻律節を||で示す。

6 はアクセント節が中韻律節、韻律節が大韻律節になっている¹⁵。10 はアクセント節 2 つで中韻律節、韻律節が大韻律節になっている。

(8) 6 における画定の違い

On ay yatar iki ay kalkar,
feneri yakar etrafa bakar.

城生(2001)

本研究

o a a a | i i a a a ||

{o a a á // i i a a á}

e e i a a | e a a a a ||

{e e i a á // e a a a á}

(9) 10 における画定の違い

Baldan tatlı, baltadan ağır.
Elde tutulmaz, çarsıda satılmaz.
Mendile konulmaz, tadına doyulmaz.

城生(2001)

本研究

a a | a ı | a a a | a ı ||

{a a a ı // a a a a ı}

e e | u u a | a ı a | a ı a ||

{e e u u a // a ı a a ı a}

e i e | o u a | a ı a | o u a ||

{e i e o u a // a ı a o u a}

11 は韻律節が大韻律節に対応し、2 つ目の大韻律節の中に中韻律節がある。

(10) 11 における画定の違い

Bir kızım var.
Gelen öper giden öper.

城生(2001)

本研究

i | ı ı | a ||

{i ı ı a}

e e | ö e | i e | ö e ||

{e e ö e // i e ö e}

¹⁵ 6 のアクセント節を () で示すと以下のようになる。(On ay) (yatar) (iki ay) (kalkar) (feneri) (yakar) (etrafa) (bakar)。なお、(On ay) と (iki ay) は福盛(2011)で示した複合語アクセントに順ずる「シntagマ」による統合機能が働いた単位となっている。

19 は 1 つめの韻律節が大韻律節に対応して、2 つの大韻律節という構造になる。他の韻律節は中韻律節に対応する。

(11) 19 における画定の違い

Bize bir misafir geldi.

Yeşil feraceli, kırmızı entarili, siyah düğmeli.

| | |
|-------------|---------------|
| 城生(2001) | 本研究 |
| ie ii ai ei | {ie ii ai ei} |
| ei eaei | {ei eaei// |
| iii eaii | iii eaii// |
| ia üei | ia üei} |

以上、具体的に対応関係のみてきたが、城生(2001)で示された韻律節は、大中小のいずれかに対応しており、質の違いはあれども境界の画定そのものに大きな問題があったわけではない。ただし、中韻律節に対応する境界を一部見落としており、その問題点は本研究で韻律節をイントネーションパターンから精査することで解消された。

4.2 イントネーションによる定型パターン

本調査で扱ったなぞなぞの一部において、イントネーションが一定のパターンをなしているものがあつたので、その構造を列記する。表記については、高音調および句末上昇調の音節は H、文末上昇調の音節は R、その他の音節は σ で示す¹⁶。アクセント単位に対してスペースを挿入し、韻律節の表記は 3 節(4)で示したとおりである。

(12) 大韻律節ごとに定型パターンがある例

10. { σ H σ R// $\sigma\sigma$ H $\sigma\sigma$ } { σ H $\sigma\sigma$ R// $\sigma\sigma$ H $\sigma\sigma\sigma$ } { $\sigma\sigma$ H $\sigma\sigma$ R// $\sigma\sigma$ H $\sigma\sigma\sigma$ }

¹⁶ 音節数の違いは考慮せず、アクセント単位および(大中小)韻律節における特徴的音調の位置を基準にパターンを析出した。

24. {σHσσ σσR// H σσH σσR}{σHσσ σσR// σH σH σσσ}¹⁷

(13a) 中韻律節ごとに定型パターンがある例

1. {σσH σH/ HσR// σH σH/ Hσσ}

8. {H σR// σH σσ}

13. {σσσH H σR// σσσH H σσ}

17. {σH σσ/ H σR// σH σ/ σH σσ}

(13a') 小韻律節ごとに定型パターンがある例

18. {σH σσH/ σσH σσ}

20. {σH σσH/ σH σσσ}

(13b) それぞれの大韻律節内で中韻律節ごとに定型パターンがある例

6. {Hσ σR// σHσ σH}{σσH σR// σσH σσ}

(13c) 前半の大韻律節内のみ中韻律節ごとに定型パターンがある例

4. {H/ σσσ HσR// Hσσσ HσR}{σσH σσR// σH σσH σσσ}¹⁸

(13d) 後半の大韻律節内のみ中韻律節ごとに定型パターンがある例

11. {H σσ R}{σH σR// σH σσ}

19. {σH σ σHσ σR}{σH σσσR// σσσH σσR// σH σσσ}

21. {H H σσ H σR// σσσH H σR}{σH σH H σR// σH σH H σσ}

本稿でとりあげた 24 例中、韻律節において定型パターンを有する例は 13 例であった。この結果をもってトルコ語のなぞなぞの過半数が先述の特徴を有しているとは断言できないが、なぞなぞの中にはイントネーションに

¹⁷ uzun uzun のような形容詞を繰り返した強調形や, gelir gider のように 2 語で句をなす構造では、福盛(2011)で述べた「シンタグマ」による統合機能が働くので、2 語で 1 つのアクセント単位をなす。

¹⁸ otuz iki は複合語アクセント規則による統合機能が働くので、2 語で 1 つのアクセント単位をなす。

よる韻文的特徴を有するものがあるとはいえる。その特徴について一考したい。

トルコにはさまざまな詩の形式がある。その中に、11 世紀のペルシア(イラン)固有の詩形であるルバーイー(rubā'ī)と呼ばれる 4 行詩¹⁹や、14 世紀のトルコ固有の詩形とされる Kadi Ahmet Burhaneddin による各行 11 音節で構成される 4 行詩がある。

ルバーイーが 4 行詩と訳されているが、4 つの半句からなる 2 行詩であり、2 つの半句で 1 つの対句をなしている。また、押韻は第 1、2、4 句が脚韻をなす²⁰。4 つの半句で 2 つの対句という構造は、本稿で示した大韻律節 2 つ、大韻律節内で中韻律節が 2 つという構造に類似している。該当するなぞなぞは 4, 6, 9, 21, 24 の 5 つである。どのような経緯で 4 行詩の詩形の影響を受けたかは不明ではあるが、なぞなぞの形式にも部分的に影響を及ぼしている。

本研究の分析では、音節数や押韻を考慮せずにイントネーションやポーズから特徴を分析しただけであるが、詩における半句が中韻律節に相当することが確認できた。文学的考察は本研究の性質上割愛するが、定型パターンが一部のなぞなぞにみられるということは、口承文芸としてのなぞなぞに韻文の特徴が反映していることが確認できたということになる。

また、詩のような定型パターンでなくとも、文末上昇調や自然下降調によって韻律節の境界を画定できることは、広義の韻文の特徴を具現化しているといえる。先述した例では、例外アクセントを含むなぞなぞでは高音調の位置にずれが生じるため、定型パターンが成立しにくい。よって、そういった例は 4.2 節では列記されていない。しかし、列記されなかった例においても韻律節末尾の特徴は一貫しているので、境界が画定できる。

音節数や押韻といった音綴、表記上から分かることだけでなく、その他のプロソディックな特徴から韻文の特徴を析出できることによって、韻文の更なる音声分析が進むことが期待できる。また、分析が進んでいくにあたって、韻律節が大中小の 3 種だけでなく、新たな分類ができるかもしれないが、それは今後の課題としたい。

¹⁹ 詩人 Omar Khayyám で有名なルバイヤート(rubā'īyāt)は、ルバーイーの複数形である。

²⁰ 基本は aaba タイプであるが、第 3 句が脚韻をふむ場合もある。

5 結語

本稿での分析を要約すると以下の通りである。

- ・城生(1998, 2001)で提唱された韻律節は、イントネーションおよびポーズといった特徴から再解析したところ、一定の特徴があることが確認できた。
- ・トルコ語のなぞなぞ分析では、韻律節を大中小の3種に区分することが有効であった。
- ・韻律節末尾における文末上昇調といった急上昇調と自然下降調が韻律節を画定する際の主要な特徴となる。

本研究では、韻律節の境界画定に関わる主たる音声学的特徴が特定のイントネーションとその後に付随するポーズであることを確認した。城生(1998, 2001)では、韻律節内および韻律節間における母音調和の配列や音節数に関する考察が行われている。音節数や押韻といった詩における韻文的特徴、桐越(2008)で提唱された韻律フレームに基づく等時性の検証は改めて別稿で考察することにしたい。

【参照文献】

- Basgöz, İlhan and Andreas Tietze (1973) *Bilmece: Corpus of Turkish riddles*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- 福盛貴弘 (2010) 「トルコ語のアクセントについて」『言語研究』137 : 41-63.
- 福盛貴弘 (2011) 「トルコ語におけるアクセントの消失 —イントネーションの影響を受けて—」寺村政男・福盛貴弘編『言語の研究Ⅱ —ユーラシア諸言語からの視座』語学教育フォーラム 24 : 192-204.大東文化大学語学教育研究所
- 城生 佰太郎 (1998) 「トルコ語のナゾナゾ分析」『文藝言語研究 言語篇』34 : 1-88.

- 城生佰太郎 (2001) 『アルタイ語対照研究—なぞなぞに見られる韻律節の構造』 勉誠出版
- 桐越舞 (2008) 「俳句のプロソディー特徴について」 『外国語学会誌』 38 : 199-211.
- 柴田武・谷川俊太郎・矢川澄子編 (1984) 『世界なぞなぞ大事典』 大修館書店

The phonetic analysis of Turkish riddles

Takahiro FUKUMORI

This paper describes phonetic features of Turkish riddles. This phonetic analysis has used the criterion of ‘*inritsusetsu* (the prosodic phrase)’ which is proposed by Jôo (1998, 2001). The results are as follows:

(1) The prosodic phrase is divided into large, middle, and small ones.

(2) The end of large prosodic phrase has a rising tone at the sentence ending or a falling tone caused by declination plus a pause. The end of middle prosodic phrase has a rising tone at the sentence ending or a falling tone caused by declination. The end of small prosodic phrase has a rising tone at the clause ending.

Turkish riddles are divided into the prosodic phrases. It is effective that we analyze Turkish riddles, using the prosodic phrase.

Faculty of Foreign Languages

Daito Bunka University

1-9-1 Takashimadaira, Itabashi, Tokyo 175-8571, Japan

E-mail: ICG01649@nifty.com